

## 海南新聞の俳句記事一斑

『ほととぎす』創刊前夜

塩崎俊彦

はじめに

明治二七年に起つた日清戦争に勝利したのち、日露戦争へと歩を進めてゆく過程で、日本は近代国家としての体裁を次第に整えていった。東京や大阪の新聞はもちろんのこと、松山の一地方新聞である海南新聞でも、日清談判の破裂から、開戦へ、その後の三国干渉や朝鮮半島情勢など、勇ましい記事が紙面に躍った。読者たちは、これまでには味わつたことのない昂揚感にひたり、好むと好まざるとにかかわらずナシヨナリズムの洗礼を受けることとなる。

日清戦争の際、従軍記者として戦地に赴くことを熱望した正岡子規もその一人であった。不運にも彼の地で病を得た子規が、神戸での療養の後、故郷松山に帰つて来たのは明治二八年八月

二五日。帰郷した子規は、すでに松山中学校の英語教師として松山に暮らしていた夏目漱石の下宿、愚陀仏庵で起居をともにすることになる。

子規とは竹馬の友であつた柳原極堂（前号は「碌堂」）は、海南新聞の記者として筆を揮つていたが、早速に愚陀仏庵を訪ね、子規に松山の俳句愛好者たちへの指導を依頼した。海南新聞の社屋が愚陀仏庵の裏手にあつたこともあり、極堂は子規、漱石のもとへ日参することになる。

極堂は、明治三〇年に松山で創刊される俳句雑誌『ほととぎす』の編集を一手に引き受けることになるが、彼これ思い合せて見れば、子規が漱石、極堂らと松山で過ごした明治二八年の五十余日が、その後の近代文学にひと筋の道を示したということができよう。

本稿では、主にこの時期の海南新聞に見える松山松風会関係の記事を取りあげ、子規、極堂が『ほととぎす』創刊に至るまでの経緯を跡づけてみたい。

### 松風会と海南新聞

海南新聞は松山の一地方紙にすぎないが、明治二十七年ごろから紙面に「松山松風会俳句」なる囲み記事を掲げ、そこに子規や漱石の句が見出されることで知られる。

松風会をはじめ、俳句に興味を抱いた松山高等小学校の教員有志の集まりであったが、次第に会員の数を増し、子規が関与するいわゆる新派の俳句結社として他に先駆けるものとなった。

松風会俳句が海南新聞に掲載されるようになるのは、明治二十七年一〇月二一日の紙面からであった。

俳道の衰ふるに久し。蕉風の幽玄、将に跡を絶たんとす。其の門に在るものにあらずと雖ども、平民文学の為に斯道の衰頹を憂ふる者、世間其数に乏しからざるべし。記者の如き、即ち其一人なり。聞く、松山市の青年某々等相会し

て松風会と唱へ、切磋琢磨斯道の為に勤むと。実に記者の意を得たるものなり。就て数句を得、即ち左に録す。是亦記者が斯道の為に尽くすの微衷のみ。本社は借すに余白を以てし、時々同会の為に俳句掲載の労を取らんとす。

### ●松山松風会俳句

露けしや竹の葉末の天の川 伸緑  
明月や内侍の眉の濃かなる 梅屋  
秋風の將軍塚を吹きめぐる 松路  
山里は芒となりて暮にけり 華山  
稲の花二百十日は過にけり 三鼠  
稲芒の宮居にもる、灯かな 半石  
葭の根を洗出しけりあきの水 愛松  
荒海を離れてあきの月夜哉 叟柳  
あきの夕壁に物かく独り哉 牛伴<sup>(2)</sup>

冒頭の文章は極堂筆と考えて誤らない。海南新聞にはすでに「本社募集発句」(後述)として、懸賞のかかった投句欄があったにもかかわらず、いささか唐突に「松山松風会俳句」というタイトルのもとにも、も一つ俳句記事が加えられたのは、記者極堂の独断によるものと考えられる。

しかし、新聞社が募集する不特定多数の読者から寄せられた句に撰を施して掲載するのはちがいが、松風会という私的な集まりである句会の記録を紙面に載せるといえるのは、いささか強引ともいえなくもない。

記事の上段には、葛屋を描く挿画（無署名）があり、おそらく下村牛伴の手になるものと思われる。<sup>3)</sup>挿画はこのあと、一月二三日（松影に三日月、無署名）、一〇月二六日（紅葉に燈籠、牛伴）、一月二二日（川辺の柳とその向こうに葛屋の影、牛伴）と続き、「松山松風会俳句」が紙面のなかで目を引いたすけとなつている。こうした構成も、編集に手慣れた極堂のアイデアであつたと考えてよい。

牛伴は東京で子規らの句会に参加しており、明治二十七年のころには松山に帰省、結成後の松風会の俳句を指導していた。同年九月二九日には東京の子規に松風会会員の俳句を送り、「近頃俳句続々日本紙上へ御掲載被成下、仲間のもの何れも楽み居候」と、松風会の俳句が新聞『日本』の俳句欄に掲載されるようになったことに謝意を表している。松風会会員の俳句が新聞『日本』の俳句欄に初出するのは、明治二十七年九月十五日からであつた。<sup>4)</sup>

牛伴は明治二八年八月中旬に上京するが、入れ替わるように

子規が松山に帰ってくる。松風会メンバーが愚陀仏庵でも句会を開くようになったために、漱石もその仲間に加わることになつた。それにともなつて、海南新聞の「松山松風会俳句」はにわか活況を呈する。しばらくは句会のたびに牛伴が撰をしたものが月に二、三回ほどのペースで掲載されていたが、九月一日の紙面より急にその頻度を増す。

九月一日

石すねて石露の葉くろし秋の雨

碌堂

送牛伴之東都

旅は憂し酒飲みならへ唐辛子

全

県令の玄関ひろし桐一葉

三鼠

白露や葎の中の立ち仏

碧梧桐

鳥とんで露おとしけり小牧山

森々

引きほどく薜の蓑からくくに

鳴雪

稲妻に見下す敵の陣屋かな

五洲

討死の位牌あたらし瓜の馬

子規

九月三日

湖こゑて山をあれゆく野分かな

碌堂

山陰に二百十日のたいこかな  
行秋に鐘つき堂の崩れけり

弔古墳

弔へば唯こうろぎの一ツ哉

秋風や將軍塚を吹て鳴る

秋の暮我眉淋し鼻淋し

將軍の古塚あれて草の花

夜を寒み我影ふんで戻けり

味噌を焼く秋のはじめの雨夜哉

命なり佐野の中山秋の蝶

九月六日

外国にかね聞く秋のゆふべかな

武蔵野や野分に立ちし道標

瘦村の秋を祭りの獅子太鼓

古御所のむぐらの中や草の花

乾より雲のいそぎの野分哉

酒を売る商人も来よ栗焼かん

立膝に腮おしつけて秋の暮

送り火のきえて何やら思ふかな

梅屋

華山

愛松

松路

一宿

漱石

三鼠

仲緑

子規

稲妻のうしろに走る峠かな

鐘つけば銀杏ちるなり建長寺

白露や芙蓉したたる音すなり

長き夜を何にふかすぞ岡の家

碧梧桐

嗽石

全

子規

東京の内藤鳴雪は、これ以前から「松山松風会俳句」に句を寄せていたが、碧梧桐は九月一日が初出となる。「嗽石」は「漱石」の誤植であろう。彼らは後にそれぞれ一家をなすが、海南新聞の読者たちにとっては、いまだ無名の存在に等しい。

このち九月に限っても、一六日、二三日、二九日、三〇日を除く毎日、「松山松風会俳句」は海南新聞の紙面を飾った。子規が帰省し会員の指導をはじめたことをとらえて、極堂は子規が撰をした松風会会員の俳句のために、連日にわたって紙面を割くことにしたようである。

四海波穏やかなればまだしも、時局は緊張の色濃く、たとえば、朝鮮半島においては、のちの京城事変につながる閔妃と大院君との対立が報じられる。同じころ、台湾では邦人五十余人が殺され、にわかに征台の論が起こり派兵のこととなった。八月には日清戦争を戦った松山の第二連隊の凱旋があり、海南新聞の紙面には戦勝気分が横溢していた。そのような折に、地

元の無名俳人たちのためにわずかな紙面を割くことは容易でなかつたと想像される。

### 極堂の回想

極堂がかなり無理をして海南新聞に松風会の詠吟を掲載したことについては、次のような自身の回想がある（『友人子規』）。

当時松山に「海南」「愛媛」の二新聞ありて、「愛媛」は御手洗不迷氏が其編輯主任であり、予は「海南」の編輯を擔当してゐたので、兩人話合つて先ず其新聞から旧派俳句を駆逐し、代わるに新俳句を以てせんことを計つた。黒田青菱なる宗匠があつて、其門下が地方に勢力を有し、新聞の俳句欄は其人々によつて握られてゐたが、初は両派併載といふことで新俳句を割込み、暫くして新俳句の独占とした。読者からも社内からも反対はあつたが強行した。兩新聞に新俳句を載せはじめしは明治二十八年の夏からであつた。七月十日の海南紙上に下村冬村（為山）氏の松山十五景と題せる夏季句が載つており、十三日には松風会会員の句、二十四日には古白一週忌追悼句として、矢張松風会会

員の句が出ており、其後引きつゞいて新俳句が発表されてゐる。

「愛媛」とあるのは、明治二二年創刊の愛媛新報（創刊時は「予讀新報」）のこと。愛媛新報が改進黨系の予讀俱樂部の機関誌であつたのに対して、明治九年創業の海南新聞（創刊時は「本県御用 愛媛新聞」）は自由党系の機関誌として知られた。ライバル紙の編集者である極堂と不迷が、新俳句を支援することについて手を握つていたのは意外であるが、不迷は松風会会員でもあつた。

「兩新聞に新俳句を載せはじめしは明治二十八年の夏」とは、海南新聞に遅れて愛媛新報にも新派の俳句が掲載されるようになった時期をいうのであろう。極堂の言う新旧の「兩派併載」とは、海南新聞誌上での、「本社募集俳句」と「松山松風会俳句」の併存のことであつた。

### 伊予派俳諧

子規の松山滞在によつて賑わしくなつた松風会句会の成果は、連日にわたつて紙面の片隅に読むことができるようになって

た。そうではあつても、海南新聞の読者たちにとっては、以前から紙面にある「本社募集発句」と、新しく加わつた「松山正風会俳句」との区別はさほど明瞭なものとなつていない。そのことをよく承知してのことか、一〇月一日の第一面には「伊予俳諧の勢力」と題して、東京日日新聞に掲載された岡野知十の「俳諧風聞記」が転載された<sup>⑤</sup>。その冒頭には、極堂の次のような文章が添えられている。

東京毎日新聞は、頃日俳諧風聞記と題して、左の如き評論をなせり。文中、明治俳諧復興の唱首は伊予派と称する新派にして、此新派を代表するものは正岡子規なりと論ずるところに至りては、伊予の俳人として意を強ふせしむるものあらん。抄して読者の閲覽に供す。因に記す。正岡子規は金州の帰途、船中病を發し、神戸、須磨に転養して、今は松山二番町の飯寓に養啊中なり。

知十の「俳諧風聞記」は、「瀬祭書屋主人子規の名の新聞「日本」に依りて世に喧伝するや、明治の新俳客は其下風に靡かざるはなきの色あり。其風潮のしかく世を風靡せし理由種々なるべしと雖ども、風聞は片々として左の如く伝へり」として、次

の五か条を掲げる。

- 一、子規が咄嗟の間に多くの同調者を得て一団体をなすに至りしは、俳諧的関係よりは、寧ろ郷里的の關係に出づ。所謂日本派の重なるものを列挙せよ。内藤鳴雪を初め其過半は愛媛県人ならぬはなし。故国を同ふし、旧藩をともにし、師弟親戚朋友の由縁ならぬはなし。鳴雪が派内に推され、子規だに之を「翁」と尊称するは、俳壇のうへよりは寧ろ郷里間に於て年長者たり、先輩たるに出るものなり。故に此派を一に「伊予派」と称するものありと。
- 二、新聞「日本」が書生間に於ける勢力は、流伝を速やかにならしめたりと。
- 三、其口調の青年俳客の口吻に適せしに依ると。
- 四、格調の高雅にして斬新なりしがゆへなりと。
- 五、風刺の意を寓せしに依ると。

海南新聞の読者は、知十が東京日日新聞紙上で読者に伝えたかったことは少し違つた角度からこの記事を読んでいたと推測される。

松山出身の青年が、俳諧において東京で高い評価を受けている。彼の周囲に集って一派をなす者たちのなかにも松山出身の者が多いという。しかも、俳諧とはいっても、自分たちが知っているような、宗匠のもとで句会を催すといった旧弊のものではないらしく、新聞によって広がり、「書生」「青年俳客」の多くから支持を得ているらしい。

海南新聞の読者は、これだけのことで充分に同朋意識をくすぐられたことであろう。なんと、当の正岡子規なる青年は、いま松山に滞在しており、会いに行こうと思えば目と鼻のさき二番町にいと記者は伝える。

知十の記事を転載することで、松山の読者に同郷人子規の東京での活躍ぶりを知らしめる極堂の如才なさが際立つ。加えて極堂は、子規たちの標榜する俳句が、老爺の手すさびといったものではなく、次代を担う青年が熱中できる文芸であることを、知十の文章を通じて伝えようとしていた。松山松風会は、その子規の指導をいま受けている。

### 「俳諧大要」を転載する

よく知られているように、子規の「俳諧大要」は、はじめ新

聞「日本」に掲載され、その毎回の掲載から数日遅れて海南新聞にも掲載された。「俳諧大要」の成立事情は、その序文に記されている。

それによれば、松山の花山（服部基徳、華山とも）という盲目の俳士が在松中の子規に、「わがために心得となるくんだりくを書きてんや」と切望したため、「其綱目ばかりを挙げてこれを松風会諸氏」に示したという。新聞「日本」に第一回が掲載されたのが明治二十八年一月二日、同じ内容が一月二十七日の海南新聞に掲載された際には、その冒頭に次の文章が加えられていた。

左俳諧大要一篇は、正岡子規子が松山滞在中、松風会員の為にもせしものなり。明治俳諧の首唱として目せられたる子規子の俳諧の上に抱持する意見をきくは、其道の人に興あらんか。即ち松風会の承諾を得て之を茲に掲載す。

この文章も極堂の手になるものであろう。極堂は、手元に届いた新聞「日本」から「俳諧大要」を海南新聞に転載したと考えられる。新聞「日本」に発表されたものを「松風会の承諾を得て」とわざわざ断るのは、いささか大げさなもの言いではあ

る。しかしそれは、「俳諧大要」が、松山での運坐などのおりに、子規が松風会の俳人たちに話した内容をもとにして成ったものであるという極堂の自負が強く働いた所為であった。

子規は身体的な健康を回復させつつ、日清戦争に従軍して味わった挫折の淵から、ふたたび俳句によって立つことを模索していた。松風会メンバーとの交流は、その契機のひとつとなったのだが、その背後には、海南新聞という舞台を提供した極堂がいた。

### もうひとつの「発句募集広告」

「松山松風会俳句」が掲載される以前から海南新聞には「本社募集発句」という記事があった。たとえば、明治二八年九月一日の紙面には次のようにある。

#### 発句募集広告

例月ノ通り左ノ規定ニ依リ発句ヲ募集ス。名吟高句続々投稿アラシコトヲ。

○入花無料。但シ郵便税自弁、不足税ノ分ハ受取ラズ。

○一題二句詠吟ノ事

○撰者涵翠居青菱宗匠

○天地人へハ景物ヲ呈ス。但當撰者ハ本誌ニ広告ス。

海南新聞一ヶ月（郵便税トモ）

○撰抜句ハ翌月初旬ヨリ海南新聞紙上へ掲載ス。

○詠草紙ハ小半紙全紙ニテ前半面へ氏名及雅号記入ノ事。但成規ニ違フモノハ景物ヲ呈セズ。

○詠草封筒へハ必ず応募発句ト明記シ編輯局宛ニテ送付ノ事。

締切毎月二十日

海南新聞株式会社

○課題

九月分 月 雞 頭

十月分 秋の夕 雁

十一月分 帰り花 神の留守

十二月分 寒月 す、掃

涵翠居黒田青菱（一八四〇～一八九六）は、松山の薬種商の家に生まれた。栗田樗堂門であった祖父白年から青菱の息青紅まで四代、松山で俳諧宗匠を勤めたことで知られる。その青菱が撰者を勤める「本社募集発句」があるにもかかわらず、同じ



海南新聞に「松山松風会俳句」を掲載することは、極堂の回想のとおり旧派の勢力圏内に「割込」む仕儀であった。

ところが、先掲の募集広告が出された同じ月、二二日の紙面には、次のような不可解な「発句募集広告」が掲載された。

#### 発句募集広告

本社は兼てより課題を設けて懸賞発句を募集し来りし処、今回懸賞発句の外、別に江湖の玉句を募集して、海南新聞毎号の紙上に掲出せんことを計る。風雅の士は左の心得書に拠りて名吟玉句続々投寄あらんことを乞ふ。

一 入花無料。当分秋季雑題、投句数無制限、某宗匠に乞ふて撰抜毎号続々掲出。

一 懸賞応募発句を見易く区別し得るために、封筒表海  
南新聞社編輯局碌堂宛にて発送のこと。

海南新聞にはすでに青菱撰にかかる「懸賞発句」があるにもかかわらず、別に発句欄を設けて、読者から「名吟玉句」を募り、選抜句を紙上に掲出するという。混乱をまねかぬよう、こちらの投句先は「碌堂」（極堂）と明記せよとも。子規在松山のことであれば、極堂の念頭にあった「某宗匠」は、つい先こ

ろ東京での活躍を報じたばかりの子規を措いて他にあるまい。

極堂は子規を直接かき口説き、子規を撰者とする俳句の募集に取り掛かろうとしていた。右と同内容の募集広告が九月二五日、二八日、二九日、十月四日、十月九日と立て続けに紙面に見えることから、極堂の企てが現実味を帯びたものであったことがうかがえる。<sup>(6)</sup>だが、この年、海南新聞の紙面には、従来の「本社募集発句」以外には「松山松風会俳句」があるのみで、新しい発句欄は見当たらない。

#### 撰者の交替

「俳諧大要」の海南新聞への連載は、明治二九年一月五日をもつてひと区切りとなった。<sup>(7)</sup>

三日後の一月八日には、例月の「本社募集発句」が掲載されるが、その撰者が唐突にも「在東京 正岡子規子」となっているのには、いささか驚きを禁じ得ない。

#### ●本社募集発句

選者 在東京 正岡子規子  
題 寒月 煤掃

百内

寒月や喰付そふに吠る犬

伊予 アイノ

(以下九句略)

九十内

寒月や松をはなれて光り晝

新居 東畝

(以下九句略)

八十内

門川や煤はきの日を濁る水

宇摩 広女

(以下九句略)

前年九月一日の「本社募集発句」(前掲)の予告では、たしかに一二月の題は「寒月」と「煤掃」であった。そこに記された撰者は青菱であったはずで、事実、一二月の「本社募集発句」(二月募集分)までは青菱が選をしていたと考えられる。こままでの紙面に撰者交替の告知は見出せないが、青菱はこの年四月に亡くなるので、その体調などの事情で急遽、撰者が青菱から子規に変更されたのかもしれない。一月一〇日には、次のような記事が見える。

●松風会 俳諧衰へて全く卑俗に流れたるを慨し、正風再

興の旗幟を東部に樹てたる正岡子規子の門派に属する松山松風会は、明治二七年の春、始めて結盟せられたるものにして、爾来二ヶ年、第一第三の土曜日を以て例会となし、俳道を研究しつゝ、あることなるが、その始めて起りし当時は、松山高等小学校の教員、会員の大部分を占め居りたりしも、今は追々異種の人物集りて、僧あり俗あり老あり幼あり、会勢も日に隆んに赴くとは聞えたり。

去るにても、世人は此の派の隆々勃興するを羨み且つ妬み、ヤレ書生発句だとか、アレ片言混りの発句だとか、何とか蚊とか難癖をつけて罵詈を試みつゝ、ありしも、今や其の発句は漸く調子整ひて、而も卑俗ならず。

適に正風の旨を得たる境まで進みたるが故、難癖効なく罵詈益なく、予の斯道を研究する者、松風会の旨とするところを会得して、志を同ふするに至ること益々多し。会運既に斯の如く隆なり。去れば同会は、来十一日、新年会を兼ねて松山魚の棚逐麗樓上に二周年の記念会を開き、尚々追々会運の隆盛を期して企画協定する処ある筈なりと云ふ。

因に曰く、本社碌堂募集として続々海南新聞に掲出せらるゝ、発句は、正岡子規子の撰にして、松風会員のものせし

もの其多分を占め居れり。

報ずるところは、松風会が二周年を迎え、盛大に会合を開かんとすることであるが、発足時より第一第三土曜日に句会を催していたこと、周囲からの非難もただならぬものであったことなど、松風会隆盛に至るまでの経緯が知られて興味深い。

だが、ここで注目されるのは、末尾に「本社碌堂募集として続々海南新聞に掲出せらるゝ発句」とあることである。「本社碌堂募集」というのは、前年九月に極堂が掲げた「発句募集広告」のことであろう。しかし、これに応じた句が「海南新聞に続々掲載」された形跡はなかった。極堂の言う「続々掲載」をどのように理解すればよいのだろうか。

極堂は九月から一〇月にかけて「発句募集広告」を続け、さらに一月八日と九日には、紙面の枠外右に「本社碌堂あて募集発句、向後冬季雑題にて投稿ありたし」と大字で記した広告も掲げていた。このような事実から、次のような想定が成り立つ。

極堂は、送られてきた俳句を、従来の松風会会員の発句とともに、東京に戻った子規に選句してもらい、返送されてきたものを「松山松風会俳句」に押し込んで掲出することにした。

その結果、「松山松風会俳句」の作者を検すれば、それまでは先に見た「松山松風会俳句」に名に見える固定された松風会会員の句がおおかたを占めていたのが、一〇月以降になると、これまで名の見えなかった作者が目につくようになる。わかりやすいところで、明治二八年九月二十七日と一〇月一日の「松山松風会俳句」を掲げてみる。

九月二十七日

杉谷やあたまの上の秋の山

愛松

語れ聞かんいざよふ月の須磨明石

花叟

秋のゆうべ大寺一つ見出しける

梅屋

秋風に虫のいりたる仁王かな

碌堂

町中や何に人寄る秋のくれ

牛伴

便船や夜を行く雁のあとや先

漱石

朝寒や坂をのほれば大鳥居

三鼠

稲妻や十萬の軍馬いななきぬ

陽松

十六夜をいざ石山の月見かな

一宿

とんぼうの海をかゝえる西日哉

子規

十月一日

栗落る音たしかなる夜の山

南洲\*

泥川の橋わたれば草の花

愛松

かや芒ついゝ高し古仏

袖浦\*

酒店の垣にはさまる芭蕉かな

梅屋

朝寒や小魚うごめく籠の底

糊生\*

あかつきや萬墻露にぬれて立つ

霽月

秋の雲越の高根にかゝりけり

燕子\*

萩二本たれて野川のながれけり

三風

鶏頭を堤てはいりぬ寺の門

梅暁\*

寄する波ひく波さては芒散る

牛伴

明月や露芋の露ははらりゝ

壺南\*

野径曲れり十歩のうちには秋の山

子規

病臥する人のもとにつかはす

一宿

葉のんで望月までに起き給へ

\*が以前の「松山松風会俳句」にはその名を見出せない作者たちである。こうした作者たちが、極堂の発句募集に応じた者たちであったと考えられる。彼らのうちには、「俳諧風聞記」などに刺激されて投句してきた、青菱撰の「本社募集俳句」の作者層より若い世代もあったかと思われる。

「碌堂宛」に投じられた句を「松山松風会俳句」に混在させ

ることは過渡的な措置であった。それが明治二十九年一月に至って、「本社募集発句」の撰者を子規が勤めるようになることで、読者からの投句はこちらにまともめられるようになる。これによって、「松山松風会俳句」は、句会の記録としての本来の姿に戻ることになった。

なお、海南新聞には、「本社募集発句」の他に「本社募集付勝俳諧」として、付勝に歌仙を万尾するものがあつた。これも青陵が撰者を勤めていたが、明治二十九年一月からは紙面に見えなくなる。さらに、これらとは別に「東雲神社奉納発句」があり、こちらも青菱撰が続いていたが、この年一月からは東京にあつた鳴雪が撰をするようになった。

明治二十九年が明けた一月の「本社募集発句」の撰者の交替は偶発的なものであつたかもしれない。だが、このようにして形の上では、極堂が目論んでいたように、海南新聞紙上から旧派の勢力は一掃され、「新俳句の独占」が成つたことになる。

### 『ほととぎす』創刊に向けて

ところが、ここで紙面に混乱が生じる。一月二日、二回目の「一二月分本社募集発句」が掲載されるが、そこには、「選

者 在東京 正岡子規宗匠撰」と麗々しくも記されていた。「発句」といい、「宗匠」といい、これでは従前の古ぼけた新聞俳壇と選ぶところがない。早速二月には「一月分本社募集俳句」と改められたが、「正岡子規宗匠撰」には手が加えられず、以後しばらくこの呼称が続く。さらに、三月の紙面では「二月分本社募集俳句」（三月三日）であったものが、「二月分本社募集俳句」（三月四日～一二日）に戻ったり、四月にはまた「三月分本社募集俳句」と修正されるなど錯綜が続く。

「発句」と「俳句」のささやかな混乱は、活字を組む段階での錯誤であったかもしれない。当時、海南新聞の印刷部にいた田中七三郎（俳号一声、河図、蛙堂など）と松川金次郎（同金波）は、極堂とともに『ほととぎす』の刊行に尽力するが、子規、極堂の影響で俳句を詠み、松風会の会員でもあった。おそらくこのころ、「松山松風会俳句」や「本社募集発（俳）句」も彼らの目を経ていただろうが、それでもこうした混乱が生じたものと思われる。「俳句」という語は、彼らにも、海南新聞の読者にも、いまだなじみの薄いものであった。

「正岡子規宗匠撰」については、極堂の原稿にそうあったと考えられる。明治三〇年に創刊された『ほととぎす』第一号には、「募集俳句」の撰者として「在東京 正岡子規宗匠」、「内

藤鳴雪宗匠」と記されていた。極堂は、旧弊な称号にどこから意義を見出していたかもしれない。選者から題を示されて句を詠むという旧派の風に泥んだ作者たちにとって、「冬季雜題」で俳句を詠んで投句するといった方法にも戸惑いがある。なにより、撰するのは「宗匠」と呼ばれる者であるほうが一般的には違和感がなかった。

極堂は、海南新聞紙上で句を募り、集まった句を東京の子規らに送って撰をせよという。それを松山に返送してもらい、原稿にまとめて「本社募集俳句」として紙面に掲載するということを明治三〇年九月ごろまで、ほぼ毎月繰り返した。協力者は河図と金波しかいないなかのことである。煩瑣な工程のうちには、さまざまな混乱を生じたことであろう。こうしたことは、取材に基づいて記事を書くという新聞記者の仕事ぶりとは大きく異なる。だが、こうした気の遠くなるような作業は、のちに『ほととぎす』で彼らが体験するであろうことと同じであった。東京から遠く離れた松山の地で俳句雑誌『ほととぎす』を刊行するという、極堂の無謀とも思われる企ては、海南新聞を舞台とした彼らの経験を通じて、あながち絵空事とは思われぬものとなっていた。

〔注〕

- (1) 海南新聞の「松風会俳句」については、和田克司「正岡子規と海南新聞の松風会俳句」〔大阪成蹊女子短期大学紀要〕二七号、一九九〇年〕に詳しい。また、俳文学会第六九回全国大会(二〇一七年二月)のシンポジウム「愚陀仏庵から『ほととぎす』創刊へ」において、竹田美喜が松山松風会俳句の海南新聞への掲載の概要について報告している。
- (2) 海南新聞の引用にあたっては、新字体を用い、適宜、濁点と改行を施した。
- (3) 牛伴(一八六五―一九四九)は松山の生まれ。中村不折と同門で、はじめ洋画家をめざしたが、為山と号して俳画をよくした。
- (4) 注1の竹田の報告による。
- (5) 「俳諧風聞記」は、東京日日新聞に明治二八年九月一八日から一〇月一日までの間、七回にわたって連載された。一〇月一日の海南新聞に掲載されたのはこのうちの「其四」について、一〇月三日に「其五」が掲載された。
- (6) このうち、一〇月四日には、「碌堂宛」の「発句募集広告」と、従来の青菱撰の「発句募集広告」が並んで掲載されている。
- (7) 新聞「日本」掲載の最終回(二十七)「第八 俳諧連歌」

は海南新聞には転載されなかった。

- (8) 明治二八年二月二日付、伴政孝(狸伴)宛子規書簡に「別封松風会稿御返璧致候。右会稿の内二点の分は、乍憚至急作者御報道被成下まじくや。これは「日本」へ掲載致度候により至急を要し候」とあり、このころ、松風会の句稿は狸伴が子規に送っていたらしい。
- (9) 明治二九年三月の「二月分東雲神社奉納十内」には、「追加 在東京 鳴雪」として、「首評の恥かくして／すき立のどれかどれやら夕霞」の吟がある。

海南新聞のマイクロフィルムを利用するにあたっては、愛媛県立図書館の御高配を賜りました。記して鳴謝申し上げます。

(しおぎさ としひこ／高知大学教授)